

らいよ 寅次郎の青春」が封切られ、全国の寅次郎ファンが、油津の堀川橋周辺を訪れるようになり、油津のまちづくりに期待が高まってきた。

平成七年（一九九五）には、市民による油津まちづくり計画「蘇れ油津港と運河のまちづくり計画策定事業報告書」（油津みなと街づくり委員会）が刊行された。この計画では、油津の歴史的資源を活かしたまちづくりが具体的に提案されて、その後の油津赤レンガ館買取保存運動に繋がっていくことになる。行政においても、「第十五回全国豊かな海づくり大会」を油津港で開催するとともに、「新しい「魚の港街づくり」基本構想・基本計画」を策定し、官民ともに、油津再生への期待が大きく高まっていく。

平成八年（一九九六）には、町並みの文化的な価値を再評価するために、（財）日本ナショナルトラストの補助を受けて、観光資源保護調査を実施した。この調査では、日南市教育委員会と鹿児島大学（指導：土田教授）、宮崎大学が、油津の伝統的な家屋二一〇棟のうち、一六三棟の実測調査や生活実態の聞き取り調査、アンケート等を実施して、建造物や堀川運河の文化的な評価が行われた。

「油津赤レンガ館買取運動」

平成九年（一九九七）には、油津みなと街づくり委員会の「蘇れ油津 港と運河のまちづくり計画策定事業報告書」において、油津再生の中核施設として位置づけられていた河野家の赤レンガ倉庫と主屋が、競売にかけられそうになる。その時の油津の人たちがとつた行動は驚くべきものであった。油津みなと街づくり委員会やNIC21のメンバーが中心となって、わずか数週間で合名会社を立ち上げることを決め、一人百万円ずつ出し合って、この物件を買い取ったのであった。当時、日本国内ではほとんど例のない、市民による文化財建造物（この時点では未指定、未登録）の買取保存運動を実現したのだ。当然、市にも協力要請があったが、このような迅速

な行動について行けるはずもなかった。

市教育委員会では、翌年になって油津赤レンガ館と主屋を文化庁の登録文化財に申請した。同時に、油津を代表する木造三階建て総銅板葺きの杉村金物本店と赤レンガ倉庫、明治三十六年（一九〇三）築造の石橋である堀川橋も登録文化財となった。

この時期、油津みなと街づくり委員会やNIC21、合名会社油津赤レンガ館の各団体は、油津を舞台に活動を展開し始めていた。油津のまち巡りパンフレットやマップの作成、町歩き案内板の設置、赤レンガ館でのミニコンサートやワインフェスタ、地ビールまつり、堀川運河まつり、堀川灯籠流しなど実に多彩な活動である。とりわけ注目されるのは、油津漁民が使用していた伝統的な木造

帆船である「チョロ船」の復元である。昭和三十年代には姿を消していたのだが、油津出身の日本海事史研究家山形欣哉氏の呼びかけに油津有志が応じ、やはり市民から寄付金を募って復元にこぎつけた。

「チョロ船」はもう一艘復元されて、市内小中学生の総合学習やまちづくりイベントに活躍している。

さらに、平成十二年（二〇〇〇）には、歴史的な町並みを活かしたまちづくりの全国組織である全国町並み保存連盟主催の第23回国町並みゼミが、日南市で開催されて、油津や飴肥、坂元棚田が舞台となり、油津の取組が全国的に注目されるきっかけとなった。

「堀川運河整備事業の展開」

堀川運河は、平成五年に運輸省の「歴史的港湾環境創造事業」の指定を受けて整備事業が開始されていたが、歴史的建造物である石積み護岸はコンクリート擁壁で覆われている部分が多く、石積み護岸の実態は不明なまま、整備計画が策定されていた。

しかしながら、堀川運河は周知の埋蔵文化財であり、「歴史的港湾環境創造事業」に先立つ埋蔵文化財発掘調査によって、既存のコンクリート擁壁の裏に大正から昭和初期に築造された石積み護岸がそ

のまま保存されていることが判明した。

さらに、平成十三年、東京大学大学院篠原修教授の指導により、国土交通省と油津港湾事務所が協議の上、今後の堀川運河整備においては、既存石積みの徹底的な保存活用を図り、往時の歴史的景観を活かすことを基本方針とした。そのためには、堀川運河の石積み護岸の規模や築造時期を明らかにする必要があることから、発掘調査に先行して、宮崎県文書センターに保管されている明治から昭和初期の公文書調査を行うこととなる。その結果、大正二年から昭和二十二年にかけての石積み護岸等の施工場所や事業者、設計書など工事記録が詳細に保存されていることも明らかになった。

こうした発掘調査と公文書調査の成果は、行政と市民、学識経験者からなる「油津地区都市デザイン会議」や「まちづくり市民協議会」の中で逐一報告されたため、堀川運河の文化財的価値が、市民に周知されることとなる。

また、篠原教授の指導による石積み護岸修復方法は、コンクリートを一切使わず、伝統工法に徹した。コンクリートに覆われた石積み護岸について、コンクリートを撤去するとともに、番号をつけて解体し、破損した石は同質の砂岩に取り替えて、再度積み直した。裏込めには栗石層と粘土層とを交互に積み重ねるといふ徹底ぶりである。そのため、通常の工事に較べて、工期もかかるし、経費もかさむことになる。したがって、堀川運河が文化財であるという位置づけがないと対外的に説明ができないという事情も発生した。

ここに至り、宮崎県油津港湾事務所の全面的な協力によって、堀川運河を登録文化財として申請することになり、平成十六年二月十七日、全国初の運河関連の登録文化財として「堀川運河護岸一石造、総延長二〇五八m、石段七所及び斜路二所付」が登録された。併せて、堀川運河に架かる昭和初期の木造橋である花峯橋と運河の取水口にある石堰堤も登録文化財となった。

日南市は、平成十四年度に都市再生本部の全国都市再生モデル事

業の指定を受け、油津地区を対象にまちづくり構想を策定し、十五年度より「身近なまちづくり支援街路事業（歴みち事業）」に着手して、県が実施している堀川運河の整備「歴史的港湾環境創造事業」と連携することにより、油津地区の歴史的資源を活かしたまちづくりを推進している。それぞれの事業を一体的に検討するため、宮崎県と日南市は、市民と行政、学識経験者からなる「油津地区都市デザイン会議（委員長篠原修教授）」を結成するとともに、国土交通省や文化庁との省庁連絡会議である「油津地区アドバイザー会議」を開催した。さらに、市民の意見を反映させるため、事業計画や調査結果については平成十四年に結成された「日南市まちづくり市民協議会」に情報提供して、意見交換を行っている。このような官民協働システムが構築されて、油津の歴史を活かしたまちづくりは着実に動き始めた。この間の油津のまちづくりについては、デザインを担当した小野寺康、南雲勝志両氏の文章が詳しい。（『都市の水辺をデザインする』二〇〇五 彰国社）

〔近年の動向〕

平成十六年三月には、市民三一名が資金を出し合って保存のために取得した「旧河野宗泰家主屋と油津赤レンガ館」が市に寄附された。市では、歴みち事業に先立つ「歴史を活かしたまちづくり基本構想」に位置づけたとおり、油津に賑わいを取り戻すための中核施設として整備するために、油津赤レンガ館等利活用検討委員会を発足させた。

日南市まちづくり市民協議会でも、平成十六年から景観アンケータを実施したり、色彩研修会等、さまざまなワークショップや研修会を開催して、平成十八年には「日南市油津地区景観条例策定にあたって」提言をまとめている。市では、これらの動きを受けて、平成十七年に宮崎県で最初の景観行政団体となり、平成十八年には「日南市美しいまちづくり景観基本条例」を制定するとともに、日南市景観協議会を発足させた。十九年には「港町油津景観計画」を

策定し、同時に「景観形成推進事業」を実施して、油津の歴史的景観に沿った建造物の新築や修景、修理に補助金を交付することとなった。

こうした油津の歴史まちづくりは、対外的にも注目されることとなり、平成十八年に「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」と「美しい日本の歴史的風土百選」に選ばれた。また、全国の赤煉瓦建物を活かしたまちづくり団体の全国組織である赤煉瓦ネットワーク二〇〇六日南大会も油津で開催された。この年には、日南市坂元棚田において、全国棚田サミットも開催されている。

マスコミにおいても、これらの動きが逐一報道されるとともに、平成十六年のNHK連続テレビ小説「わかば」のロケや、平成十九年の「裸の大将」ロケなど、油津の歴史的景観がロケ地として取り上げられることが多くなってきた。

「今後の展望」

平成十九年度には、平成五年からの「歴史的港湾環境創造事業」による堀川運河整備が完了した。最終年度であるこの年には、飢肥杉の集積場（土場）として利用されていた油津大橋と見法寺橋までの区間が完成し、飢肥杉のシンボルとして、伝統工法と最新の構造力学、地元大工と橋梁専門家、そして都市デザイン専門家のコラボレーションによる屋根付きの木製ゲルバー工法による「夢見橋」が完成した。市民は「堀川に屋根付き橋をかくつかい実行委員会」を立ち上げて、木橋の部材（込み栓）に市内の小中学生全員にメッセージを記入してもらうとともに、橋の名前も全国に公募して、審査の結果、市内小学生による「夢見橋」と決まった。こうした堀川運河整備事業は、平成二十年度のグッドデザイン賞（公共事業部門）を受賞することとなった。

平成十八年度から始まったシーニックバイウェイ（日本風景街道）に登録された「日南海岸きらめきライン」では、油津を対象に「通り名による社会実験」を実施して、古写真や地元住民の聞き取

り結果をマップにするとともに、飢肥杉の通り名表示を設置した。行政においても、平成十七年度から「まちづくり交付金事業」を導入して、油津の景観整備を推進するとともに、平成十九年度から三カ年計画で、油津赤レンガ館の整備を実施している。さらに、「みなとの賑わい創出担い手育成支援事業」の認定を受けて、チョロ船の操船技術の継承や定期運行、観光ガイドの育成等を行っている。

油津のまちづくりは、日南市の施策にも大きく影響してきた。堀川運河の整備に関わった南雲勝志氏が、全国スギダラケ倶楽部の中心人物であったことも影響して、かつて日南市の中核的な産業であった飢肥杉の復興をめざす「飢肥杉を核としたまちづくり推進プロジェクトチーム」を結成して、飢肥杉ブランドの推進と、飢肥杉を活かしたまちづくりを推進することになった。一方、油津の中心市街地活性化のために、「日南市中心市街地活性化推進プロジェクト会議」も立ち上がり、商工会議所内に「株式会社日南まちづくり会社」が設立された。

5 まとめ

日南市の歴史的資源を活かしたまちづくりは、飢肥と油津だけではない。本市酒谷地区の坂元棚田や大谷橋、小布施の滝を舞台にした、「やっちみろかい酒谷」と行政が一体となった活動は、坂元の棚田を全国棚田百選にするとともに、平成十八年の全国棚田サミット開催など、全国的な情報発信を行っている。坂元棚田では、石垣清掃や稲刈り等のボランティアや石積み技術講習会の開催、棚田オーナー制度の取組など、地元住民と市民、棚田オーナーなどの交流を積極的に行うことよって、地域の活性化を目指してきた。

日南海岸国定公園の鶴戸地区では、「かっとしやる協議会」による鶴戸山や七浦七峠の再評価が、積極的に進められているし、細田